

Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩崎, 千尋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032255

主論文の要旨

Effect of hematuria on the outcome of IgA nephropathy

(血尿の程度が IgA 腎症の予後に与える影響～高度尿蛋白症例の検討～)

東京女子医科大学 内科学(第四)教室

(指導：新田孝作教授)

岩崎千尋

Journal of Nephropathology, 2016; 5(2) :72-78 に掲載

DOI: 10.15171/jnp.2016.12

【要旨】

本研究では、IgA 腎症において、血尿の程度が予後に与える影響を調べた。

1980 年から 2005 年に当院で診断した IgA 腎症のうち、蛋白尿が 1g/日以上で、プレドニゾン内服加療を行った 75 症例を生検時尿中赤血球が 1 視野に 20 未満の症例(L 群 55 例)と 20 以上の症例(H 群 20 例)に分け比較した。

両群の臨床所見、Oxford 分類による病理所見では、尿中赤血球以外に有意差は認めなかった。両群ともに治療にて蛋白尿は 1g/g・Cre 以下、血尿も軽快し、 Kaplan-Meier 法を用いた両群の 20 年腎生存率は L 群 58.0%、H 群 45.2 % で有意差は認めなかった。Cox 比例ハザードモデルを用いた多変量解析では、 eGFR の低下が独立した危険因子であり (HR 2.39, 95%CI 1.29-4.51, p=0.006)、 高度血尿は危険因子ではなかった。

生検時の血尿の程度は、病理所見や尿蛋白、腎機能と関連せず、高度血尿が治療抵抗性を示すことなくステロイド治療で減少し、腎予後にも影響しなかった。